

# 久高島由来譚

高 橋 六 二

## はじめに

久高島は行政上は沖縄県島尻郡知念村字久高と位置づけられている。沖縄本島南部の東方にある島である。古来「神の島」と称されてきているのは、たぶん琉球国王府との関係が深かったことと、年間で数十に及ぶ祭事を現在に実修してきていることからであろう。琉球の最初の正史『中山世鑑』は羽地朝秀（向象賢）が尚質王三年（一六五〇）に編述したものといい、その巻一「琉球開闢之事」には天帝の命で阿摩美久という神が島造りをしたとある。

先づ一番ニ、国頭ニ、辺土ノ安須森、次ニ今鬼神<sup>ナキジン</sup>ノ、カナヒヤブ、次ニ知念森、斉場嶽、藪薩ノ浦原、次ニ玉城アマツヅ、次ニ久高コバウ森、次ニ首里森、真玉森、次ニ島々国々ノ、嶽々森森ヲバ、作りテケリ。

この「久高コバウ森」は久高島のクボウタキとされ、現在も篤く崇敬されている。他の聖地はすべて沖縄本島内にあるのに比べ、これ

だけが島にあるのは特異である。また同巻同条には五穀の起源について、

阿摩美久、天ヘノボリ、五穀ノ種子を乞下リ、麦粟菽黍ノ、数種ヲバ、初テ久高島ニゾ蒔給。稲ヲバ、知念大川ノ後、又玉城ヲケミゾニゾ芸給。去程ニ、麦ハ春ノ中、稲ハ夏ノ初ニ、熟シテケレバ、先ヅ天神地祇ニ、祭ントテ、七日戒、三日斎シテ、祭リテケレバ、天神地祇モ、悦ノアマリニヤ、現ジ給テ、初テ寿ヲゾシ給ケル。今在々取々<sup>（所々）</sup>、春夏四度ノ祭神、其始ナリ。二月ニ久高ノ行幸、四月ニ知念・玉城ノ行幸モ、其ヨリシテ始リケル。是又、報<sup>レ</sup>本返<sup>レ</sup>始<sup>レ</sup>之大祭也。可<sup>レ</sup>敬々々。吾朝神国ト申ハ、此等ノ事ニ依テ也。

とあり、久高島を稲を除く穀物の起源地としている。これによって二月の久高行幸があるとして王府と久高島との結び付きを説いている。「琉球開闢之事」はどんな資料に基づいて編まれたのか、管見ではいまだ知りえないが、王府がこうした神話を必要としたことは明らかで

ある。以後の史書がどれもこのことを引き継いで記しているからでもある。

ところでこうした記述とは別に久高島の由来を説いた文献がある。

『遺老説伝』である。これは『球陽』（琉球の正史。初回の編集は鄭乗哲らが一七四三―四五年に行なう）の外巻として同時期にまとめられたという、いわば伝説・説話集である。小稿はこれに収められている久高島の由来についての、表現上のいくつかの考察を加えてみようとするものである。

## 一 久高島由来——黄金の瓜子物語

この題名は嘉手納宗徳編訳『遺老説伝』（角川書店、昭和五十三年刊）の読み下し文の目録によったものである。この書によってまず全文をみておこう。

<sup>1</sup> 往古の世、<sup>2</sup> 玉城郡百名邑に、一男人有り、<sup>3</sup> 乳名は白樽。<sup>4</sup> 賦性至孝にして操心仁義。恒に善事を為し、敢て悪を為さず。玉城按司、深く之れを褒美し、遂に長男免武登能按司の女を以て娶して他の妻と為す。<sup>5</sup> 一日、夫婦一同に、野に出で山に登り、光景を玩楽す。忽ち東溟の中に一小島有りて、波濤の間に隠見するを見る。白樽、深く奇とし且つ怪とし、時々其の野に出で行き、用心之れを見る。日晴れ雲散じ風和やかに波静かなれば、則ち一島を現在し、隔海甚だ近し。此の時、威勢相競ひ、干戈未だ弭まず。<sup>6</sup> 是に於て、白樽深く此の世の変乱を厭

ひ、以て海島に遁去せんとす。夫婦相共に商議し、即ち小舟に乗り、<sup>7</sup> 東に向ひて行く。未だ一瞬息ならずして、早や他の島に至る。舟を繫ぎて上岸し、<sup>8</sup> 遍く四境を巡るに、泉甘く土肥え、野曠く山低く、宜しく邑を設け家を構へ、以て栖居を為すべし。而して今、食物有ること没く、日と海辺に出でて螺貝を拾取し、以て日度を致す。是れに由りて夫婦、共に伊敷泊に到り、<sup>9</sup> 以て子孫繁衍、食物豊饒を祈る。未だ尽くは祈り畢らざるに、倏ち一白壺の波に随ひて浮び来る有り。白樽、衣を揚げて海に入り、撈せんとするに、其の壺波間に湮没し、背て看見せず。婦女、屋久留川に至りて其の身を沐浴し、改めて潔衣を穿ち、<sup>10</sup> 亦他の浜に行き、<sup>11</sup> 衣袖を展開して以て白壺を俟つに、白壺自ら袖上に来る。婦女、喜びて其の壺を執り、其の蓋を控開するに、内に麦三種（一は小麦、一は葉多嘉麦、一は大麦）・粟三種（佐久和・餅也・和佐）・豆一種（俗に小豆と叫ぶ）を載す。即ち其の種を古間口の地に播く。<sup>12</sup> 節、正月に届るや、<sup>13</sup> 麦穂出発すること、<sup>14</sup> 甚だ常の麦と異なる。白樽、深く之れを奇異とし、之れを禁城に奉献す。<sup>15</sup> 二月に至り、其の麦已に熟し、恭しく吉旦を挾び、其の麦を奉献す。王深く之れを喜び、而して之れを頂戴し、即ち人をして神酒を醸し、以て各処の森嶽を祭らしめ、次に百工に賜ふ。此れよりの後、<sup>16</sup> 五穀豊饒し、<sup>17</sup> 子孫繁衍し、遂に以て邑と為る。之れを名づけて久高島と曰ふ。其の長女於戸兼、専ら祝女職に任じ、各嶽の祭祀を掌る。長男真仁牛は、父の家統を襲ぐ。其の子孫、延きて今世に至るまで、外間根人為り。二女思樽、巫女と為り、遂に禁城の巫女に擢でられ、<sup>18</sup> 日夜城内に栖居す。其

の人と為りや、生質貞静、容貌美麗にして、<sup>28</sup>迥かに凡人に異なる。王、内宮に召し入れ、王夫人と為す。深く寵愛を蒙り、栄光已甚だし。是に於て、思樽懐胎す。是れに由りて諸妾、之れを嫉忌し、敢て相交話せず。一日、思樽夫人、<sup>21</sup>謬りて放屁を致す。諸妾、欣々然として之れを喜び、其の謬事を將て、時々相話し、以て哂笑を為す。<sup>22</sup>思樽夫人、御前に侍し難く、遂に告暇して郷に回る。荏苒の間、数月を歴閱し、已に臨盆の月に当る。思樽、意に想へらく、聖主の後胤を、穢処に生産すれば、恐らくは罪を獲ること有らんと。別に一座<sup>23</sup>（今に至るまで外間根人の家に、其の産座猶ほ存す）を設け、一男を降誕す。名を金松兼<sup>24</sup>と曰ふ。長成して七歳、屢く母に向ひて父を問ふ。<sup>25</sup>思樽兼夫人、只く汝は無父為り、我一身にて出づるのみと答ふ。年已に八歳、頻りに父親を問ひて曰く、天は、陰陽を以てして万物を生育する者なり。況んや人は皆父母有り、何を以て独身のみ父無きや。伏して乞ふ、愚父を悉らし告げよと。思樽夫人、答説すること前の如し。金松兼、再三強ひて問ふも、思樽夫人敢て告知せず。<sup>26</sup>思金松兼曰く、人として父を知らざれば、人為るを得ず。活生するも益無し。何ぞ早死せざらんやと。遂に朝夕食を絶ちて痛哭す。是に於て、思樽夫人、深く其の食を絶つを憫み、細さに、寵を蒙り嫉まるるの事を告ぐ。始より終に至るまで説知すること一遍。<sup>27</sup>然れども汝素より海島に生る。衣服・容貌、京都に像ず。天顔を拝睹するの願有りと雖も、志を遂ぐることは能はざらん。此の故に前日の問訊に、敢て告知せずと。思金松兼之れを聞き、即ち伊敷泊<sup>28</sup>に到り、<sup>29</sup>東方に仰ぎ向ひて曰く、母は、王側

に侍し、愚身を懷妊するも、倏ち小過有り、病を告げて郷に回る。今、予鄙邑に長成し、心志安んぜず。伏して祈る、<sup>30</sup>天神地祇、此の悩枕に鑒み、憫を小幼に垂れ、聖主に入朝するを得れば、<sup>31</sup>隆恩既る無しと。毎朝告祈して、敢て懈怠せず。次いで七日清晨に至り、<sup>32</sup>黄金一物の大いに光輝を發し、波に随ひて浮来する有り。思金松兼、深く之れを奇怪とし、亦衣袖を展げて之れを撈するに、<sup>33</sup>即ち黄金の瓜子なり。思金松兼、大いに之れを歡喜し、即ち其の瓜子を懷にし、母に京に赴かんことを告ぐ。即刻起身し、城に入りて朝せんと請ふ。禁城の役人、或は其の髪赤く衣粗なるを哂ひ、或は癩童の妄りに城内に進むを責む。<sup>34</sup>思金松兼、容貌躋々、威儀蕩々、稍しも驚惶の氣あらず、専ら入覲して題奏せんことを請ふ。諸役人、深く之れを奇怪とし、遂に之れを内院に聞し、御前に召し入る。<sup>35</sup>思金松兼、直ちに其の瓜子を懷内より出し、以て献上を為して曰く、<sup>36</sup>此の瓜種は、国家の至宝なり、世界の罕有なり。蓋し天甘雨を降らせ、肥土已に湿るの時、特に未だ放屁せざるの女をして此の種を播植せしむれば、<sup>37</sup>則ち蕃衍茂盛し、結実甚だ夥からんと。王、大いに之れを笑ひて曰く、人此の世に生れ、誰か放屁せざらんやと。思金松兼曰く、人放屁する有るも、何の咎むることか之れ有らんと。即ち王、其の言を聴き、深く内院に至り、思金松兼を召し入れ、密かに其の縁由を問ふ。思金松兼、細さに、其の母の放屁して郷に回り、愚身を出産するの由を奏す。王其の事を聞き、以て城内に栖居せしめんとす。<sup>38</sup>然れども東海小島の外夷の孩童、以て急には陞せて男と為し難し。暫く故郷に回し、以て時候を俟たしむ。

厥の後、王、世子有ること無し。<sup>39</sup>遂に思金松兼を召し、封じて世子と爲す。即ち大位を踐む。是れに由りて聖主、二年に一次、親しく久高島に幸す。<sup>41</sup>且つ毎年一次、外間根人並びに祝女、御仲門より、恭しく魚類数品を献ず。則ち祝女を、内院に召し入れ、盛宴及び茶菓・烟草等の物を恩賜す。根人にも亦御玉貫一双を賜ふ。<sup>42</sup>康熙庚子、其の献物を裁去すとししか云ふ。

読みがなは嘉手納編訳本の読み下し文の注を便宜的に当てたものである。傍線と番号は以下の論述の便のために付したものである。

まずこの話は傍線20までを境に大きく二分して読むことができる。

その一はいわば白樽夫婦の「島建て」といってよい部分であり、その二は思樽・金松兼母子の雌伏・出世の話から、久高島と王府との関係の起源を説いた部分である。以下、注解ふううにそれぞれの表現に触れておこう。

1 『遺老説伝』の冒頭の定型表現の一つで、他に「往昔の世」「上古の世」「大荒の際」「往古の時」「往昔の時」「昔」「太古の世」「往昔の日」「昔日」「昔時」「往古」「往昔」などがある。

2 現在の玉城村百名である。

3 嘉手納編訳本の注に「幼名。童名も同じ。」とある。ふつうワラビナーと言う。

4 久高島ではシラタローと言い、またシラタロー・ハクタローと

言う人もある。久高島のウドゥンミヤーにシラタローデンがある。

5 現在の玉城村仲村渠なみだかりにミントウングスクがあり、拝所になっている。

6・7 東方への憧憬・敬仰とみることができる。後文9・29もそうである。

8 一種の、始祖神の巡行・国見・土地ほめ・定住地選定の表現と見ることができる。

9 久高島ではイシキバマと言って東海岸にあり、現在も聖地とされている。特に旧暦二月のウプヌシガナシーのウグワンダティ、十二月のウプヌシガナシーのフィルガフーの時にはここで祭事がある。後文28にも再出する。

10 後文17と呼応する。以下は食物起源の神話・祭事とみることができる。冒頭に引用した『中山世鑑』の記事をはじめ諸書にもある。

また久高島にも伝承があり、それぞれに多少の違いがあるが今は触れないでおく。

11 後文33と対応させて考える必要がある。ユイムン（寄り物）を尊ぶ心意が伺われる。

12 久高島ではヤグルカーと言って西海岸にあり、9で述べた祭時にはここにも行く人々があり、他に旧暦一月・五月のマブッチマッテイーの時などにノロなどが身を潔め、水を汲んでくる。

13 後文34と対応させて考える必要がある。一種の神迎えの作法と考えられる。

14 久高島では初めて麦を播いた所をハタスと伝え、島の中央部にある。ヤグルカー・ハタス・イシキバマはほぼ北・南に一直線に結ばれる。

15 以下、粟・豆には触れず麦に集中して述べられる点は注意しておいてよい。正月に麦穂が出発した点が常と異なるという文脈であろう。久高島では正月にマブッチマッティ（麦の穂祭り）を今に行なっている。

16 王府で二月に麦穂祭を行なう、その由来を述べたものと読むことができる。後文40と対応する。

17 穀物、それも麦が代表して豊饒し、そのことが子孫繁衍をももたらしたという論理はやはり注意しておく必要がある。後に詳しく論及する。「邑と為る」は「島建て」の表現。

18 名の由来は説明されていない。久高島の人は「イチメーアルフボージマ」と言うことがあり、島で最上の聖地クボーウタキをフボーウタキとも言うから、もとクバ（蒲葵）島の意でクバ↓クボー（フボー）↓クコウ（久高）↓クタカと転化したものか。『おもろさうし』巻13―七六九の「こばしま」（蒲葵島）は久高島のこととされている。

19 この、長女が祝女、長男が根人、二女が巫女となるという語りかたは、たとえば『球陽』巻一「国初」にも、天帝子の生んだ三男二女について長男は国君、二男は接司、三男は百姓、長女は君々、次女は祝々の始となったとあるのと同じ型である。

20 話は前後一続きになっているがこの後は思樽の話になるから、

やはりここで段落とみておく。次の「其の人と為りや……」の部分は冒頭の白樽を説くのにその性質から始めているのにも共通するからである。

21 はなはだ下品なことだとする認識が古来広くあったのだろうが、昔話「屁ひり爺」「屁ひり嫁」などの中には福運を招くこととして語るものもある。ここもその類のもので、後文37と対応して語りの重要素であったことがわかる。後掲の類話にもたいいてい取りあげられている。放屁はいわば世界の変換・逆転をもたらしものと考えられていたのだろう。あるいは始源的には、民俗宗教上で巫女としての霊力の発頭にかかわる行為・現象であったのかもしれない。

22 昔話「屁ひり嫁」の場合も里へ追ひ返されることになっている。

23 現在も久高島の外間殿の隣に西威王誕生のアシャギというのがある。

24 いわばワラビナーである。後文26以下は思金松兼と変わる。後に詳述する。ここから以降は金松兼を中心に話は展開する。

25 嘉手納編訳本の注に、思樽の下に「兼」を付したのは貴婦人の名を示す、とある。

26 嘉手納編訳本の注に、頭に「思」をつけたのは貴人の名を示す、とある。

27 後文36・38と対応する。

28 前文9と対応する。

29 前文6・7・9・28と対応する。久高島ではイシキバマから望む東方の海彼にニライ・カナイがあると信じられている。

30 久高島ではクニの神を三十五神と考えている。

31 祈る内容が「聖主に入朝するを得」ること、すなわち父に会えることであり、前文10とは大きく異なる。久高島では祈願・祭事は朝にするのがよいとされる。

32 久高島では奇数を一般に尊ぶが特に七を言う場合が多い。前文の「七歳」もその一例であるが、この場合は月齢を意識しているのだろう。すなわち満月に願いがかなう、その前段階としての七日なのだろう。

33 前文11・後文35と対応する。

34 前文13に対応する。

35 前文11・33と対応する。神意の現われとしての寄り物が、色では白と黄金で表わされ、ともに種子であることに注意しておく必要がある。白色は銀の色でもあるから、沖縄で讚美表現によく用いる金・銀がここに表わされているのだということになる。

36 前文27・後文38に対応する。「京都に像」ざる容貌として「髪赤く」、衣服が「粗なる」とやや具体化され、「癪童」とまでみられている。

37 いわば思金松兼の頓智である。以下の問答において思金松兼は勝ちを制することになる。その際に「放屁」が契機になっているのは前文21と対応しているからである。昔話「屁ひり嫁」の場合は放屁が

多く大根取りで失敗し、梨もぎで幸運をつかむことになっている。ここで播種・結実について言われているのもそれと共通する点があるのだろう。つまり笑話化する以前の農耕についての神の教示・呪法がこうした説話上の表現をとっているとみるべきではないか。

38 前文27・36の延長として賤視した表現をとっているが、いわば異界より来た小人の姿として描いているのだろう。それは後文39と対応させてみると「神の子」だということになる。

39 久高友輔誌『恵姓系統誌』（昭和十五年）に「是レ即チ西威王其ノ人ナリ」、新垣孫一『琉球発祥史』（昭和三十年）に「思金松兼は英祖王系第五代の西威王ならんと」とあり、久高島でも一般にそう伝えられている。前文23の注参照。

40 国王の久高島行幸の由来を説いたものである。前文16と対応する。冒頭に引用した『中山世鑑』の記事と照応するものであり、その他の諸書にも同様に述べられている。

41 前文15・16の後文に対応するもので当代化したのかもしれない。

42 尚敬王八年（一七二〇）に当たる。

以上の分析によってこの話をまとめてみると、前半と後半とに対応する表現が目立ち、結局一つ事をくりかえし述べたものであることが明らかである。その一つ事とは東方からのユイムンがつまりは種子であり、その奉献を通じて王府と久高島とのつながりが語られたもので

あり、いわば王権と穀霊との由来をさしていることになる。

さてこの話は10の注に述べたごとくいくつかの異伝があるが、道光二十七年（一八四七）丁未八月吉日の識語のある『久高島由来記』は、字句の違いこそあれ内容に大差はない。それは今日、次のものによって読むことができる。

田島利三郎『琉球国由来記集』（明29書写？）

「琉球教育」31号（明31刊）

田村浩『琉球共産村落之研究』（昭2刊）

新垣孫一『琉球発祥史』（昭30刊）

『那覇市史』資料編第二巻下（昭42刊）

中山盛茂『琉球史辞典』（文教図書、昭44刊）

『沖縄県久高島資料』（古典と民俗学の会、昭54刊）

『イザイホー調査報告』（沖縄県教育委員会、昭54刊）

『神道大系』神社篇52（昭57刊）

『知念村史』第一巻（昭58刊）

『沖縄久高島調査報告書』（法政大学沖縄文化研究所、昭60刊）

また『遺老説伝』の話は広く好まれたものらしく、これを引用したものに『恵姓系統誌』（昭15誌？『知念村史』所収）があり、翻案したものにも次のようなものがある。

本山桂川『南島情趣』（大14刊）

喜納緑村『琉球昔噺集』（昭8刊）

島袋源一郎『琉球百話』（昭16刊）

『琉球民話集』（昭35刊）

川平朝申『おきなわの昔話』（昭40刊）

伊波南哲『南国の民話』（昭47刊）

仲井真元楷『沖縄民話集』（昭49刊）

金城唯仁『南国沖縄の昔話』（昭55刊）

これらについては史書の異伝とともに別に検討してみる必要がある  
ので、今は紹介するにとどめておく。

## 二 昔話の「黄金の瓜種」

さて沖縄には「黄金の瓜種」という昔話が広く分布している。とり  
あえず『日本昔話通観』26（同朋舎、昭58刊）によってみると、那覇市  
松尾の例をあげて類話を十二種併記している。その他に管見に入った  
昔話集の例を加えて列挙すると次のようになる。内容を理解するため  
に要点を記しておくことにする。

### 1 那覇市松尾（日本昔話通観。以下、通観と記す）

昔の王様のお子様の話。久高島生まれの金松兼。以下、父のことを  
問う、壺に瓜の種が入っている、首里城に瓜種売りに行く、王との屁  
をひらぬ女の問答など『遺老説伝』の筋に同じ。王が後継ぎにする  
というのを断わり、久高島を与えられて島尻の王となる。

### 2 那覇市田原（通観・那覇の民話資料1）

放屁、黄金の瓜種、問答、王となる点は同じ。ある所というだけで  
久高島とのつながりはない、米作りで水を得て稔りをもたらしたこと

を村人に疑われる、鍛冶屋に黄金の瓜種を打たせる、手足に三日月の形があるという点が特異である。

3 東風平町宜次（こちんだの民話）

元旦に他人の放屁で久高島に島流しとなる。

4 東風平町東風平（こちんだの民話）

久高の女の話になっているが、黄金の瓜種のことではなく、子が王の前で屁をする話になっている。

5 東風平町小城（こちんだの民話）

王様の家におならをしない薬を売りに行く。

6 東風平町小城（こちんだの民話）

屁をやらない女の指輪だと売りに行く。

7 具志川市川田（通観）

王妻の津堅アカッチュが放屁して津堅に島流しとなる。生まれた子が七歳の時、父のことを聞く。元旦に城門に立ってふんどしを買いに来た津堅アカッチュだと名告る。屁をひらない人を「津堅アカッチュ」と言う。

8 具志川市喜仲（通観）

久高島に流される。「黄金のなる瓜実」を「屁をひらない薬」でもあると言う。

9 具志川市塩屋（通観）

「この種をまけば黄金の花が咲く」と言う。

10 具志川市宮里（通観）

主旨は同じ。

11 与那城村宮城（通観）

首里の王が久高島に来て美しい娘を妻にして連れ帰る。母は子に「私が死んだら父親が着たこの着物を持って訪ねて行け」と言う。子は着物で瓜を包んで持って行く。

12 渡嘉敷（とかしきの民話）

津堅島に流す。「ああ、着いたんだね」と言ってその島をチキンと名づけた。それから久高に流されて「下ってしまったなあ」と言ってクラカと名づけた。妾に「屁をしない女の薬」だと売る。

13 平良市池間（通観）

伊江島に流される。子は七歳になってすいかの種を売りに行く。

14 平良市池間（通観・ゆがたい4）

お膳を運んでいて屁をひり、伊波村に島流しになる。子は石投げ遊びをしている時に、他の子に御主の子だから石も当たらないと言われる。ヤラブの木の実を黄金の瓜種だと売りに行く。祝いの歌がある。

15 平良市池間（通観）

伊平屋に流される。ヤラブの実を黄金の種だと売りに行く。

16 宮古郡上野村宮国（通観）

子は父親の家のそばの太木に登って「どこが私の父親の家だろう」と毎日歌う。ひょうたんの種を屁をひらない女が植えると一日で実ができて食べられる、と売る。父親が子を確認するために箸をつけないで食膳を出すと、子は膳の端を割って箸にして食べる。



17 宮古郡城辺町（通観・ゆがたい2）

王と久高島の女の話。別人の屁で離縁される。

18 多良間村仲筋（通観）

王が後継ぎの子と瓜売りの子に膳を出す、瓜売りの子は自分のに箸がないので小刀で膳を切って割り箸にして食べる。

これらのうちには『遺老説伝』を知っているものかとみられるものもあるが、それぞれに変化にとんでいる。ただ、だいたいが王とその妻の放屁、子の誕生と問父、黄金の瓜種売りと問答、子は王の跡継ぎとなる、といった点が筋立てになっていることは動かない。ということは『遺老説伝』とこの昔話の近似性が問題になる。しかし、それは『遺老説伝』がこれらの昔話の型を踏襲したものか、これらの昔話が『遺老説伝』の変容したものか、にわかには判断しがたいことである。それでも昔話のほうがすべて『遺老説伝』の後半の内容と共通しているだけであること、王にかかわる話であることからすると、両者相互の問題というよりは、それを超えた神話的な原型を想定すべきなのかもしれない。

### 三 思金松兼

『遺老説伝』を読み解くうえで見落してはならないのは、思金松兼という名である。「思」は初めは付いていなかったものであり、貴人の名であることを示しているのだとすれば、「金松兼」についてみればよいことになる。しかし「兼」がやはり貴人を示しているのだとすれ

ば、「金松」が残ることになる。しかも「金」がまた讃称または尊称らしいから、結局はこの名は「松」がもとになっていることになる。

「松」は植物としても人名としても、沖縄でも尊ばれたようである。

ところでこれをマツガネという名でみると、多くの用例がある。尚賢王の童名は思松金であったし、家譜にはさまざまな松金という人物が見られる。「仲村渠マカト遺念火」の伝説に登場する伊平屋島の美男松金は、伊是名島諸見の男だとも尚円王だとも言われる（『伊江村史』上巻、昭55刊）。琉歌「西の松金がいぢきや御衣召しみわち、遊びゆたる昔忘れぐれしや」の「西の松金」は尚円王だとも伝える（『世礼国男全集』、昭50刊）。昔話「金武松金」はまた恩納松金ともいい、非常に美男であったという（『沖縄昔話資料』1、昭50刊）。石垣島の各地には「松金じらば」「松金ゆんた」が伝わり、川平の「松金じらば」では松金は賢い子で家造りをするとうたう（『南島歌謡大成』IV、昭54刊）。以上はみな男性であるが、松金という女性もいる。伊勢国長野の展真という人が渡ってきて生んだ一女「展真の松金」は、伊勢神楽神道を父に伝受されて内侍を勤めたという（『琉球国由来記』巻二「七社祝部」）。そして奄美のユタが伝承する呪詞「オモイマツガネ」の場合は、絶世の美女、神の生まれで太陽に感精して懐胎、神の子としてのカネノマタラベを生む。この子はいろいろな遊びで他の子に勝つが、父くらべで父のいないことに気づいてオモイマツガネに尋ねると、太陽神の子だと教えられる。そして母子ともにユタの祖になったというのだが、マタラベは高膳の四隅をはがして箸にし、供物の米を炊いて食べると

語るものもある（山下欣一『奄美のシャーマニズム』、昭52刊。『南島歌謡大成』V、昭54刊）。問父という点で金松兼や昔話と共通し、箸の点では昔話16・18と共通しているのは興味をひく。また奄美の大和村今里のノロの唱えるオムケ・オーホリのカミグチにも「親ノロノオモイマツガネヤ」とある（『奄美大和村の年中行事』昭60刊）。さらには伊是名村での二月の「田植祝おりめ」の「みせせる」には「てだこわのまつがね」、つまり太陽の子の松金という表現がある（『琉球国由来記』卷十六）。これは「甘種・白種」（稲）の播種を教えてくれる神としてある点で特に注目される。

以上によってマツガネは神に選ばれた、聖性を備えたものの名であることがわかる。思金松兼も琉球文化圏におけるこうしたマツガネの名を負っていることになる。思金松兼はその名からして神の子であることを示していたのである。さらには、引用文中の二重傍線部のごとく、この子が七歳の時に父を問うたというのは、その歳までが神の子という民俗論理によったのであり、母との問答に無父たることが繰り返されるのも、この子が通常の人の子ではないことをいう場合の常套表現によっているのだと読める。しかもその母思樽は巫女であったという。このことは、奄美のユタの祖というオモイマツガネとカネノマタラベ母子を想起させる。つまり樽とタラと、同語かどうかは不明だが近似していることは確かである。マタラベの場合は『おもろさうし』第十三―九〇三の「北谷におわるまたらひ」のマタラヒと同じ語構成で（日本思想大系『おもろさうし』はヒを接尾敬称辞という）、

つまり真太郎の意であろう。しかも太郎はタルーと発音して樽と宛て字することもあったらしい（『沖縄文化史辞典』）。すると思樽・思金松兼とオモイマツガネ・カネノマタラベの両母子は、その称指を逆転させてはいるものの、同意の名を共有していることになる。いうならばこれらの母子は神の子と聖なる母だったのである。ただ思樽・思金松兼と漢字で表記した段階には、容器としての樽が沖縄では松材が多かったということもあるいは意識されていたかもしれないということ、少し考え合わせておいてよいかもしれない。

### おわりに

この話は「黄金の瓜種」という題で広く知られていたことは先にみたとおりである。『遺老説伝』では初め「黄金の瓜子」が浮来したとし、思金松兼がこれを王に献上する段階に突如「瓜種」に変わっている。「瓜子」も「瓜種」も大差ない表記なのだろうが、「瓜子」の場合は果実としての瓜に比重があり、「瓜種」の場合はもちろんその種子をさしていることになる。微妙な違いではあるがいちおうはこだわっておきたい。

琉球の瓜はどんなものであったのか。『琉球国由来記』卷三・事始 乾・動植物門には西瓜・苦瓜・長瓜は中国から帶來して栽種、青瓜・冬瓜・胡瓜・菓子瓜・瓢等は薩州から帶來して栽えたかとある。ひととおりの瓜がそろっていると言ってよいのだろうか、今の「瓜子」はどれをさすのか。あるいは瓢ではなかったかと思われる。沖縄では瓢箪

をチブル（人の頭のこと、形が似ている）といい、乾燥して種子・茶・水などを入れる容器や柄杓などに多用したという（『沖縄文化史辞典』）。現に久高島では一月のマブッチマッティー（麦の穂祭り）の時に半球形の瓢箪にヤグルカーの水を入れ、麦の穂を入れてマブッチ（粥状の一種の酒）を据えた膳の前に置く。この容器をチブルガーキといい、久高ノロ安泉ナへさんの話では五穀の種が入っていたのはこれだということであった。

瓜にしる瓢箪にしる、民俗信仰では聖なる実・容器であったことは今さら言うまでもない。ここでの場合、傍線33のごとく「黄金一物の大いに光輝を發」する、傍線35のごとく「黄金の瓜子」とあってその高貴・高価性が強調されている。しかしそれは単に物質的価値に対する表現ではなく、象徴物としての意味を高め深めるためのものであったのだらう。つまりこれが浮来したのは「清晨」であるから「黄金」は太陽光の輝きではなかったか。言い換えれば「黄金の瓜子」とは太陽神の霊力の結実したものではなかったか。それは思金松兼の「聖主に入朝するを得」しめよとの祈りに対する神の恵みであり、これを王に献上することによって思金松兼は世子となり、大位を踐むことになる。ということは「黄金の瓜子」とは王位継承上の象徴物だと言ってもよいことにならう。その「瓜種」は「結実甚だ夥からん」という呪力を持っている。これは前半部の「白壺」を得たことによって「五穀豊饒し、子孫繁衍し」たことと重なる。その「白壺」には麦・粟・豆の種が入っていたことによっている。特にその麦は「常の麦と異な」

って正月に出穂するものであったから、白樽は「之れを奇異とし」て「禁城に奉獻」し、二月に熟した麦を「奉獻」したもので王は神酒を醸して森嶽を祭らせ、人々に賜わったとある。いわば麦穂祭の起源譚であるが、ここでも麦（種）の奉獻が繰り返され、結果として村建てがなされることになる。つまりこの久高島由来譚は穀種といわゆる人種を授かることによって久高島は成り立ち、王権は確立したことを語ろうとしたものだといえることができる。久高島はそういう聖地として王府から位置づけられ、聖主の行幸もなされたわけである。しかもその行幸は王の再生を幻想したものであったかもしれない。してみるとこの久高島由来譚は、民間では昔話として語られてはいるが、本来は神話たりえたはずのものだといえることができる。

本稿は昭和六十三年度跡見学園留学助成費により一年間、琉球大学文学部池宮正治教授のもとで研修した成果の一部である。この骨子は平成元年三月十七日、池宮教授の研究室において開いていただいた研修報告会で述べたもので、御出席の各位から多大な御教示・助言をいただいたことに心から謝意を表する次第である。